

研究成果報告書

(よしはら ひろし)

氏名 吉原 寛

現職 新潟県立教育センター 指導主事

修了年月、専攻・コース名 平成14年3月修了 学校教育専攻 発達臨床コース

研究テーマ 学校生活スキルと主観的学校ストレッサーとの関連についての検討

1. 問題と目的 近年、学校ストレスの観点から学校不適応を検討することは重要となっている。学校ストレスの要因の一つとして、学校ストレッサーが挙げられる。学校ストレッサーの研究については、多くの尺度が日常場面を分類したストレッサー尺度になっている。一方、吉原・藤生(2001)ではある出来事に対して嫌悪的に感じるストレッサーとして、主観的学校ストレッサー尺度を開発している。また、学校ストレッサーに影響を与える要因の一つとして社会的スキルが挙げられる。特に飯田・石隈(2006)では、学校生活を送る上で出会う教育課題の解決に求められるスキルを学校生活スキルと定義して、学校生活スキルの学校ストレッサーへの影響について検討している。その結果、学校生活スキルが高い生徒は、学校ストレッサーの認知を低減することを明らかにしている。飯田・石隈(2006)では、学校生活スキルの影響については、従来からの日常場面を分類した学校ストレッサーを対象としている。しかし、主観的学校ストレッサーに対する学校生活スキルの影響については検討されていない。本研究は、高校生を対象に学校生活スキルと主観的学校ストレッサーとの関連について検討し、学校不適応の生徒へのスキル教育に生かせる有効な知見を得ることを目的とする。

2. 方法 対象者は全日制高校1~3年339名であった。調査は2013年9月に実施された。使用した尺度は、主観的学校ストレッサー尺度(吉原・藤生, 2001)と学校生活スキル尺度(飯田ら, 2009)であった。主観的学校ストレッサー尺度の下位尺度は、「自己能力の低さ」「人から受ける不利益」「有意義な時間の欲求」「人からの評価」「人とのつきあい方」「悪い結果の予想」。学校生活スキル尺度の下位尺度は、「コミュニケーションスキル」「進路決定スキル」「自己学習スキル」「集団活動スキル」「健康維持スキル」。両尺度とも妥当性・信頼性は確認されている。LHRの時間に調査協力を求めた。ストレッサー尺度については経験頻度と嫌悪度について任意で回答を求めた。また、回答はそれぞれ4件法で個人のペースで行われ、30分程度の時間を要した。

3. 結果と考察 学校生活スキル尺度の各下位尺度得点について、それぞれ中央値を基準に得点の高い群と低い群に分割した。主観的学校ストレッサー尺度では各項目の経験頻度と嫌悪度を掛け合わせて各下位尺度得点を算出した。主観的学校ストレッサー尺度を従属変数とし、各群の平均値による t 検定を行った。その結果、コミュニケーションスキルでは、人からの評価のストレッサーにおいて、低群のストレッサーの認知が高群より有意に高かった($t=2.90, p<.01$)。人とうまくコミュニケーションを取れない生徒は、相手の気持ちを理解できず、相手が自分のことをどう思っているのか、自分に対する評価を気にしてストレスをためる傾向があることが示唆された。一方で進路決定スキルでは、人から受ける不利益において低群のストレッサーの認知が高群より低いことが示された($t=2.03, p<.05$)。また、自己学習スキル、集団活動スキル、健康維持スキルでは有意差は見られなかった。これらの結果から、学校生活スキルの向上は主観的学校ストレッサーへの低減効果は限定的であることが示めされた。